

青年期の精神健康に関する研究

— 特に高校生に関する、Maslow 理論からの動機論的アプローチ —

生 越 達 美

問題及び目的

Goldstein, K., Allport, G.W., Rogers, C.R., Yahoda, M., Maslow, A. H. 等に見られるように、人格心理学あるいは臨床心理学の分野において、いわゆる精神的に健康なる人格 (Mental healthy Personality) に関する研究は増々重視されるようになって来ている。それは正常と異常あるいは精神的に病気でない者を正常者とする従来からの消極的基準に対する反省から生れて来た研究上の方向であると共に、心理学的な意味での人間性の潜在的可能性に対する認識の深化を無視し得ない研究上の趨勢である。しかし精神的健康は社会的文化的規準によって必ずしも一律に概念規定することができない、いわゆる価値的側面を内包した概念であり、この問題に取り組んだ研究者達はほぼ一様に厳密な定義を下すことをさけて幾つかの基準を設定して精神的健康の様態を示している。諸家に共通して見られる基準は「自我の統合性」「情緒的安定性」「自己受容」「可能性実現への志向性」などであろう。

精神的に健康なる人格に対して、それをスタティックな人格記述に止まらず、全体的・力動的視点からとらえていった研究者の一人として Maslow がいる。彼は人間の動機を階層あるものと見なし、最下層に生理学的欲求を、最高位に成長欲求 (自己実現への欲求) を置き、下位の動機満足を通して順次上位の動機づけがなされてゆくといういわゆる gratification theory の立場を主張している。

精神的に健康なる人格に関する実証的研究は Duncan, C.B. (1966), Wright, L. (1971), Starksman, S. (1958), Crutchfield, R.S. (1955), Rogers, and Dymond (1954) など決して少なくないが、Maslow 理論の実証的研究は少ない。それは Maslow の主張する成長欲求の測定が極めて困難であるためと思われる。

従来動機研究の中でこの Maslow の成長欲求に最も近い動機として研究対象にされているものに McClelland and Atkinson (1953) に代表される達成動機がある。達成動機の研究はそこで取り扱われる動機変数とその測定方法上の未解決の問題を残しながら、Birney, R.C. (1968), Hechhausen, H.C. (1963) 等によって批判的に発展されながら研究されて来ている。彼らにお

いては達成動機を成功期待と失敗恐怖の2側面においてとらえようとしている。

筆者は従来達成動機に包含されている成功期待—失敗恐怖2種の心的力の背景にある接近—回避モデルにかえて Maslow の成長 \longleftrightarrow 安全のシエマを導入することによって、成長欲求 (成長動機づけ) の程度を達成動機測定方式によってとらえることが可能なのではないかと考えた。

一方、従来から不安・動揺の高まりやすい発達期として青年期心性が注目されて来ているが、青年期における精神的健康の問題は増々今日的な研究課題として重要になって来ている。

以上の問題点に立って、研究目的を以下のごとく設定した。

- (1) Maslow の gratification theory (欲求満足が成長動機づけの決定要因となる) を高校生を被験者として実証的に検討する。
- (2) 成長動機づけの客観的測定として従来用いられて来た達成動機測定方法 (TAT 想像物語法による) を新たな scoring の視点を導入することによって使用し得る可能性を検討する。

そして研究に先立って次の2つの基本仮説を設定し、一連の研究を行った。

- 仮説1. 欲求満足は成長動機を高め、一方欲求不満足は成長動機を低下させるであろう。かかる成長動機づけのあり方は本質的に男女共通してみられるであろう。
- 仮説2. 成長動機づけの程度を成功期待・失敗恐怖2指標によって測定する時、成功期待優位の者は失敗恐怖優位の者より成長動機づけの程度が高いと言えるであろう。すなわち前者は後者より欲求満足度が高いであろう。

研究 (I)

方法. 社会的 (学校) 場面及び家庭生活場面における満足・不満足経験調査 (自由記述法) を行ない、経験内容、そこでのドミナントな動機、対象、経験の影響のあ

* 研究 I, 研究 II—1, 研究 II—2 の都合3つの研究を行なったが、それぞれの研究において、基本仮説から導いた作業仮説を設定したのであるが、紙面上省略する。

り方の4点について分析した。

被験者、愛知県内国・公立2高等学校生徒(2, 3年)78名(男子40名, 女子38名)。

結果と考察。

A高等学校においては社会的(学校)場面の調査だけを行なったが、満足経験は「自信・意欲の向上」「自己の成長」等 positive な方向に影響した者が男・女共通して圧倒的に多い。逆に不満足経験は「劣等感・不安感」「悩み」「意欲低下」等 negative な方向に影響した者が圧倒的に多くなっている。

B高等学校においては社会的(学校)場面と家庭生活場面両方の調査を行なった。それらの結果はA高等学校の場合と近似していた。なおその結果は $\chi^2=33.5\sim 48.5$, $df=3$, $p<.005$ で有意性も保証された。その結果は仮説1を支持しているものと考えられた。

尚社会的(学校)場面においては満足・不満足経験のドミナントな動機として4つの欲求があり、そのあり方には性差がみられた($\chi^2=3.921\sim 4.758$, $df=1$, $p<.05$)一方家庭生活場面においては満足・不満足経験におけるドミナントな動機として親和欲求が大半を占めており、性差は見られない($\chi^2=1.745$, $df=1$, $d<.25$)。

研究(Ⅱ-1)

目的。(予備実験)本実験で用いる TAT 想像物語 scoring において導入する重みづけ方法 (Table 3) の妥当性を検証し、さらに使用図版選択の基準を客観的に示すことを目的とする。

方法。個人実験により対比較法、品等法、によって図版刺激価を測定し、さらに TAT 想像物語法における Positive カテゴリー、Negative カテゴリーの出現比率を求め、前者と後者との関係を比較検討する。

被験者。大学生20名(男子10名, 女子10名)。

表1 ポジティブ・カテゴリーの出現率

カード番号	男子	女子	全体
Mc 1	83.9%	87.5%	85.7%
Mc 2	63.6%	91.3%	76.4%
H2	89.5%	69.2%	77.9%
JM 1	62.9%	67.4%	65.4%
B 1	52.2%	41.2%	45.6%

* McClelland らの scoring system での下位カテゴリー (A I, T I, N, Ga+, G+, I+)

** 同上, Ga-, G-, I-, Bp, Bw.

結果。対比較法、品等法を通じ H2 を除くと Mc 1 → Mc 2 → JM 1 → B 1 の順位で図版刺激はより不成功に、より暗く、より葛藤的に認知されることが明らかになり、そこには性差は見られない。各図版における想像物語法中に示された Positive カテゴリー出現比率の変化を示したものが表1である。男女によって Mc 2, H2 に差が見られるが、全体では Mc 1 → Mc 2 = H2 → JM 1 → B 1 の順に Positive カテゴリーの占める比率は減少している ($\chi^2=26.582$, $df=4$, $p<.05$)。以上の結果から重みづけの根拠が得られたと考えた。また H2 は使用図版から除外した。

研究(Ⅱ-2) 本実験

方法。満足・不満足度の測定のための文章完成法テスト(40項目)を作成し、自己受容(2領域)、社会生活満足度(3領域)、家庭生活満足度尺度(2領域)、生活 Mode(3領域)に渡る5点尺度によって評定した。又、TAT 想像物語を用いて成功期待・失敗恐怖を測定した。使用図版は既述の4枚である。

被験者。愛知県内公立高校119名(男子72名, 女子47名, いずれも2年生)。

結果と考察。満足度においては性差は見られない。また、成功期待・失敗恐怖得点**に対して図版提示順効果は見られず、図版間の差が有意に影響していることが反復ラテン方格配置による分散分析の結果明らかになり、成功期待カテゴリー (Positive カテゴリー) の出現比率の変化は予備実験の結果に近似しており統計的にも有意であった ($\chi^2=9.208\sim 18.565$, $df=3$, $p<.005$)。

満足・不満足度と成功期待とは有意な正の相関となり ($r=.256\sim .275$, $p>.05$)、失敗恐怖とは無相関であった。男子は成功期待と失敗恐怖とは無相関であったが、女子は有意な性の相関が示された ($r=.388$, $p<.01$)。

満足・不満足度、成功期待、失敗恐怖それぞれの得点50以上を高群、50未満を低群として満足群・不満足群に成功期待・失敗恐怖それぞれの高低2群がどのように含まれるかを分析した。男子は満足群に成功期待高群が多く、不満足群に成功期待低群が多くなっている ($\chi^2=6.294$, $df=1$, $p<.025$)。しかし失敗恐怖を指標とした場合には顕著な差は見られない。一方女子は成功期待を指標とした場合に顕著な差は見られなかったが、満足群に失敗恐怖低群が多く、不満足群に失敗恐怖高群が多い ($\chi^2=4.778$, $df=1$, $p<.05$)。又、全体においては満足

* Positive カテゴリー/(Positive カテゴリー+ Negative カテゴリー)×100によって算出した。

** ほぼ McClelland 等の scoring system に準拠している。

群に、成功期待>失敗恐怖の者が、不満足群に失敗恐怖>成功期待の者が多いことも示された ($\chi^2=3.879$ $df=1$ $p<.05$)。

成功期待・失敗恐怖それぞれ高低2水準の組み合わせによって4群を抽出し、各群に占める満足群の比率を示すと Table 2 のようになっている。男子では高・低群→高・高群→低・高群→低・低群と満足群の占める比率が低下し、女子では高・低群→低・低群→高・高群→低・高群という順で満足群の占める比率は低下する傾向にあるが統計的に有意ではなかった($\chi^2=0.106\sim7.737$, $df=3$, $p<.10$)。

次に、上記4群の満足度 z 得点平均値を算出した(表

表2 高・低, 高・高, 低・高, 低・低, 各群における満足群(250)の比率

	高・低	高・高	低・高	低・低
男子	75%	70.6%	47.4%	38.5%
女子	75	37.5	28.6	60.6
全体	75	54.5	42.3	46.3

3表 4群の満足・不満足度(z得点平均値)

	男子			女子			全体		
	N	\bar{x}	S.D.	N	\bar{x}	S.D.	N	\bar{x}	S.D.
高・低群	8	55.34	9.15	8	55.76	7.09	16	55.55	8.21
高・高群	17	51.95	8.11	16	48.96	11.24	33	50.50	9.84
低・高群	19	49.77	9.81	7	45.49	7.35	26	48.62	9.38
低・低群	26	46.59	10.94	15	51.37	9.65	41	48.34	10.44

3)。男子は高・低群→高・高群→低・高群→低・低群とほぼ単調減少し、女子は高・低群→低・低群→高・高群→低・高群と低下しており、そこには性差が見られる。各群間の平均値の差の検定をしたところ、男子は高・低群と低・低群間に有意な差が示され(差8.75, $t=2.022$,

$p<.05$)、女子は高・低群と低・高群間に有意な差が見られた(差10.27, $t=2.562$, $p<.025$)。男女込みの全体では高・低群と低・高群間(差6.93, $t=2.451$, $p<.025$)高・低群と低・低群間(差7.21, $t=2.379$, $p<.025$)及び高・低群と高・高群間(差5.05, $t=1.737$, $p<.10$)という有意差とそれに近い差があった。以上の結果から、仮説1, 仮説2は充分とは言えないまでもほぼ支持されと考えられよう。なお、研究(I), (II)を通じて得られた性差——特に想像物語法による成功期待と失敗恐怖の測定に顕著に示された性差については、いわゆるTAT想像物語法における「カタルシス仮説」を女子に適用することによって一応一貫した考察をすることができたが、予測に止ってしまった。

今後に残された問題

既述の性差に関する問題は今後さらに検討を要する問題として残された。また、成功期待・失敗恐怖2指標のみで成長動機づけの程度をとらえてゆくことに関しても不備が痛感された。これはより、規模の大きな測定Dataの分析、臨床実践から得たDataの分析の統合を通して他のTAT想像物語分析技法を併用してゆかね

ばならないと考えられる。さらに、精神健康を規定する要因として主に精神分析の立場から主張されている自我形成史上におけるcritical pointの問題も研究の中に組み込んで検討していかねばならないだろう。